

## 令和6年度第3回みやぎ観光振興会議仙南圏域会議 議事録

### 1 開 会

### 2 あいさつ

### 3 議 事

#### ・議事（1）第6期みやぎ観光戦略プラン（中間案）について

宮城県経済商工観光部観光戦略課 松本観光誘客推進担当課長から資料1～3により、「第6期みやぎ観光戦略プラン（中間案）について」説明

（佐々木座長）

- ・議事（1）について、今日欠席された委員から届いている意見を紹介ください。

#### 【意見等】

（事務局）

（小野委員意見）中間案の56ページに関する意見

- ・「第五章 推進体制等について」の「（1）各実施主体の役割」に各々の立場ごとにカテゴリー分けされているが、観光事業従事者として、どのようにしたらこの役割が果たせるのか、イメージできかねる。

観光事業者の「観光客に対する快適な環境及び心のこもったサービスの提供」は、まず快適な環境にするための設備投資が必要になるが、設備投資に要する資金は容易に予算化されない事が予想される。地域で観光事業を担っている団体に、それほど資金の余裕があるとは考えにくい。

「心のこもったサービス」というものは、達成状況の判定・判断がわからない。インターネット上に施設の評価・レビュー情報があがっているが、いくらでも捏造できるような情報は判断材料には適していないと考える。

- ・また、「地域活性化に向けた他産業との連携」が大切になってくる事は理解できるが、その連携にどれだけ人的工数がかけられるのか？という点が気にかかる。現状、人手不足が大きな問題になっている中、事業所一つとってもその場所の事業を回すだけで精一杯。そこにどれだけ効果を生むかわからない業務連携を、根拠の無い状態で一から事業を始めるといふことに人的リソースを割くことは難しいと考える。私自身の周辺環境から、以上のような事が懸念される事をお伝えしたい。

（伊藤淳委員）

- ・2ページ「基本理念」に、「オールラウンドな観光地」とあり、言いたいことや目指すところは理解できるが、オールラウンドという言葉は飛びぬけた魅力が無い、全て平均点、という伝わり方がしないかというところが心配。詳細の事業で飛びぬけたものを作っていくという理解でよいか。
- ・台湾の半導体事業者が宮城に来なくなったことが大きな話題になっている。その方たちを迎えるための予算が違う事業に使われることになるのか。
- ・宮城オルレについて、これからどこまで突き詰めていく想定で、どこがゴールなのかを詳しく聞きたい。

（観光戦略課）

- ・今後観光に持続性を持たせていくためには、ひとつのカテゴリーにとどまらず、県民総参加、様々な媒体や人が連携していく必要があり、一部の方々が突出して頑張るのではなく、それぞれのカテゴリーで頑張っている方が連携して取り組むことで相乗効果が生まれる。
- ・県議会の提案条例で、観光創造県民条例が震災前に可決された。リソースが足りない、と意見にあったが、限られた資源を活用するためには、連携が重要なことから、一緒になって取り組むという意味で「オールラウンド」を入れさせていただいた。  
意見にあった、突出したものが現状では十分ではないので、みんなで作るという思いを込めてプランを作成した。

- ・オルレは現在5コース。今後8コースになる予定。  
震災後、インバウンドを含めた宿泊者が減った状態を復活させるための、ひとつのコンテンツとして県議会議員の皆さんと連携して調整してきた。一方で経済効果がまだ見えないというところもある。コースが増え、周遊してもらうことで、県内に長くとどまり消費を促すような仕組みを作ることで、付加価値を高めることができる。オルレ以外のアドベンチャーコンテンツと結びつけて、取り組んでいきたい。
- ・ゴールはどのように付加価値を高めていくかというところ。第6期はしっかり取り組んでいきたいと思う。

(佐々木座長)

- ・基本理念は、オールラウンドではなく、絞った方が、今後、市町で観光計画に取り組む時にやりやすいと思う。
- ・いろいろなコンテンツツーリズムが並んで載っているので、コンテンツを一覧表などで整理し、経済効果の大小や、事業者の手数・手間の多少、いわゆるメリット・デメリットを示した方が、議論しやすいと思う。

- ・議事(2) 仙南圏域の施策の方向性及び取組について  
事務局から資料4により、「仙南圏域の施策の方向性及び取組について」説明

(佐々木座長)

- ・仙南圏域というエリアで示されるが、基本的には自治体レベルで見ている。その地区・地域ごとの詳細な戦略は見えていないが、数字ではこのようになる。  
一方で、統計は取り方によって左右されるため、数値は冷静に見る必要があるが、今回の設定75万人泊が、強気なのか弱気なのかも含め、この案について、議論していきたい。  
議事(2)について、本日欠席された委員の意見の紹介をお願いします。

【意見等】

(事務局)

(一條委員意見)

- ・これから連泊のお客様をどう増やすことができるかがポイント  
そのために、エリアのリソースと、どう関係性を構築して販売していくか。販売するためには、できるだけ単価を上げていけること。決済方法をどうするかも考える必要がある。
- ・情報の発信については、インフルエンサーに手伝ってもらい、わかりやすく編集した動画や写真で、仙南エリアでの時間の過ごし方を紹介してもらう必要がある。土地勘がない初めての旅行者も、移動距離・移動時間がわかれば、旅のプランが立てやすい。  
ただしエリアを拡大し過ぎず、伝わりやすく、わかりやすく、地域を限定した発信が効果的か。どのように紹介するかを考える必要がある。
- ・インバウンドについては、増加はありがたいが、言語対応について、考えなくてはならない。  
旅館の場合は、各施設で考慮することなので、あまり触れる必要はないと思う。
- ・「食材」の掘り起こしが面白いかと考える。高級食材をはじめとして、旅人は食べ飽きている可能性がある。地元になにかあるのか。ここでしか食べられないものを発掘することが必要かもしれない。「限定」「ここだけ」「今だけ」に対応すると、単価が上がってもお金を払ってくれる。

(小野寺委員意見)

- ・地域周遊プランの造成は非常に良いが、地域にどういった資源やイベントがあるのか、情報を収集し、地域内で共有し、かつ外部に総括的に発信していくことが欠かせない。  
地域内の観光産業だけでなく、事業者等にも情報を広げ、その情報に合わせて自分たちとしては何ができるのかを考え、いかにお客様を取り込んでいくか考えていけるようにしていけば、観光産業だけではなく、宮城県全体が盛り上がっていく。オール宮城で対応する意識醸成が目標達成に欠かせない。広く啓蒙活動をお願いしたい。

- ・特色あるコンテンツは、地元にいると当たり前過ぎて資源であることに気づかないことが多い。それを拾い上げる取り組みが市町村任せになっているような気がする。地域のつながりで市町村が情報収集に当たるのが効率的なのも分かるが、外部や専門家などから見たほうが地域に眠る資源について、気づきが多い。県内全域に観光客を呼び込むと言いながら、そのような取り組みについて県が主体的に取り組むところが弱い。
- ・毎年のように新たに観光資源を作るのも良いが、その年限りで終わることも多い。資源を作って終わるのはもったいない。もっと大事に育ててほしい。継続して周知していくこと、それを活用して他産業とコラボすることで認知度も上がり、その地域の特色として捉えていける要素もあると思う。

(笠原委員意見)

事業者の立場から、県にお願いしたいこと

- ・掘り起こしと発信と連携  
県が目指すべき観光というのは、県で何か大きな施設等を造るなら別だが、それぞれの地域に今ある魅力を活かしてほしい。その上で、地域の事業者の連携や地域間の連携を、県が主導して行ってほしい。また地域に今ある魅力も切り口を変えて、いろいろな側面から情報発信をお願いしたい。
- ・市町村の連携の推進  
市町村も懸命に観光政策をしているが、連携はまだ足りないようだ。県が主導して市町村で共通する政策を連携し、効率的、効果的な動きにしてほしい。
- ・目に見える効果  
広く政策を実施することも大切だが、集中的に予算投下して県の観光政策の成果をシンボリックに取り上げられる事例も必要。特に宿泊税に関しては、目に見える成果が必要

(大沼委員)

- ・宿泊人数の目標設定について、宿泊業者も、コロナ渦を経て宿泊客の集め方が変化している。以前は大人数のグループ、客室一部屋あたりの人数を増やすという考え方が強かったが、コロナ禍以降、働く人もいないため、満室にはできない。目標を立てることは簡単だが、経営者としては、宿泊人数が減っても利益率を上げて、商売していこうと考える。国でも高付加価値で宿泊単価を上げる考え方である。小規模の施設も、温泉関係の施設も、宿泊単価を上げる形にしたいが、可処分所得が減っている状況で、本当に宿泊単価を上げて、お客様に来ていただけるか、不安な部分がある。
- ・少しでも魅力のあるところは、こういう魅力があるということを県でも発信してほしい。
- ・蔵王町でもジオパークが認定される見込みだが、実際に、ジオパークでどのぐらい宿泊客が増えるのか。修学旅行が増えるのか？増えたとしても、それを受け入れられる宿泊施設が、果たして蔵王に何施設あるのか？この仙南圏域で、そういう方々を受け入れられる施設はいくつあるのか。栗原ジオパーク認定の時に、栗原市にどのぐらい宿泊人数増えるのか質問したが、栗原市にも宿泊施設がそんなにない、という話を聞いた。
- ・観光も商売なので、お金を儲けることが基本にある。その基本を外して、集客数を増やしても、その人たちに地元で消費してもらえなければ、果たして観光業界のためになるのかということが、私たちの疑問であって、その辺を県が、宿泊などに誘導して、いかにお金を落とさせていただけるかという形に発信していただければ、仙南圏域に対してかなりプラスになると思う。その辺、ぜひ検討していただきたい。

(佐々木座長)

- ・委員は大半が事業者。関係者は自治体。自治体は基本的に来客数の増加がゴール。事業者は、こう売れる、お金が落ちるところがゴールなので、事業者側に歩み寄る必要がある。資料2の3ページ、県の観光の課題①に、「宿泊者数の増加による観光消費額の拡大」を一番目に挙げている。ここに向き合うことは、ぜひ持ち帰って議論していただく必要がある。
- ・マストツアーからマイクロツーリズムに変わり、宿泊者目標の数字だけを並べていいのかという意見は、もっともな考え方。各事業者の利益率にまでは踏み込めないかもしれないが、この変化に対して、これまでどおりの右肩上がりの数字を作ることが本当にいいのか、ということには親身になって考えて

ほしい。わからない時は事業者に聞きに行ってもいいと思う。

- ・宿泊税で得た税収で事業者の利益率をどう上げるかという戦略を謳えるとよい。
- ・観光事業者は、仙南圏域にどのくらいあるのか。

(大沼委員)

- ・宮城県全体だと1,240者登録されているが、実態は1,100者ぐらいか。

(観光戦略課)

- ・仙南では137者。廃業もあるので、もう少し少ないと思われる。

(佐々木座長)

- ・100者くらいというと、顔が見える数。感想だが、利益率を考えるならば、どういう直接支援をするかに踏み込むことが早い気もする。

(安倍委員)

- ・オルレには、どのくらい参加者がおり、どこの国の方が、どのくらい参加しているのか、興味がある。

(観光戦略課)

- ・平成30年からのコース開設で、これまでの延べ数で6万2千人。  
インバウンドはまだ2,000人程度で、国内の利用者の方が多いという実情。県内の方々も多いので、やはり日帰り、歩いてすぐ帰るという方も多い。県外からも、国外からも、少しでも多くの方々を呼び込むために、コンテンツをどう磨いていくかは、これからの課題

(安倍委員)

- ・資料では、国内の方とインバウンドの方の使われる金額が2.7倍ぐらい違うが、どのような使われ方をされているのかも興味がある。

(観光戦略課)

- ・資料2-2ページの「3数値目標」「4観光消費額単価」では、令和5年の日本人の観光消費額単価が26,000円、外国人は71,000円で、約2.5倍となっている。  
日本人に比べて外国人の消費行動は旺盛。観光庁の「訪日外国人消費動向調査」では、訪日外国人の消費行動として大きいものは、宿泊費で35%、買い物代が26%。飲食費が25%で、この3つが大きい要素を占めている。  
外国人の方、特に欧米豪の方々は、円安もあって消費額が高いという現状。

(佐々木座長)

- ・インバウンドは空港近くのイオンモールの買い物利用が多い。仙台空港を入口に周遊して、戻ってくるので、どの辺りを狙うのか。そういう戦略も必要かと思う。  
オルレは歩いたあと、逃がさないようにしたい。  
東日本周遊切符を利用していると、宮城に来て、他県に流出しているというデータもある。

(大沼委員)

- ・インバウンドに対して他県の助成等が大きいため、仙台空港から入国して、そこから他県に行っているとも聞いている。  
他県では予算を使って、お客さんを呼び込もうという強いミッションが感じられる。宮城県にはそういうところが感じられない。

(佐々木座長)

- ・空港に近接する仙南圏域に宿泊客をいかに落とすかということは、大事なことだと思う。

(渡部委員)

- ・インバウンドと一言で括っているが、例えばどの国、富裕層であるとか、どの層のインバウンドの誘致強化を目標として掲げているか知りたい。  
スキーで北海道に行くが、ニセコなどは昼食で、カレー、ラーメンが3,000円。それでも人が来るという状況を作っている。  
どういったところに対して、何を強化していくのか、というところを知りたい。

(事務局)

- ・観光戦略課から全体の話をする前に、我々地方振興事務所の取組みとして、SNSは今まで日本語でしか発信していなかったが、今、訪日客数が好調と言われている、台湾や香港の富裕層、欧米から来ている方々に向けて、英語の翻訳をつけてみることで変化があらわれないかやってみている。  
インスタグラムでは、閲覧者の国別の割合も出るのですが、まだ数は非常に少ないが、中国、韓国、台湾、タイ、オーストラリアなども見ていただいているようなデータは出てきている。継続的に、英語での発信に取り組んでいながら、外国人へ直接アプローチをしてお声を聞きたいというのもあり、アンケートも始めたところ。こちらに来ている外国人の方の声を拾いながら、どの国の方がたくさん来ていて、どういったところが求められているのかというのを、戦略を練っていきたいと今、動き出しているところ。

(観光戦略課)

- ・資料3 中間案の16ページ、右側の図表28では、宮城県の国籍別宿泊者数の割合として台湾が約半分。台湾との定期便が運航していることもあり、多い状況。  
一方で、図表29 国籍・地域別消費単価では、欧米豪と言われる地域の消費単価が非常に高い。  
アメリカに関しては7%程度で、宿泊も増えてきているが、それ以外、フランス、イギリスなどの定期便がない地域は、東北に足を運ぶ機会がない。  
このような地域をどのように取り込んでいくのか、一朝一夕に、簡単にできることではないと思っている。  
どのように成田から引っ張ってくるかということも含めて、東北各県と連携していかなければならぬ部分になると思うので、しっかりと戦略を立ててやっていかなくてはならないと考えている。

(村上委員)

- ・道の駅村田はオルレの出発地点であり、オルレのプラス効果は、宿泊や景色。村田コースではコースを歩くと蔵の町並みや蔵王が見え、観光のPRになる。  
目的がオルレの方は、約13キロのコースを大体4~5時間かけて歩くので、一概に買い物にはつながっていないという感じが見受けられる。  
道の駅村田は農産物や地場産品の販売をしている。以前、宮城県のグリーンツーリズムの会長をやっていたこともあり、地域活性化のため、山形との交流で、互いの農産物を出品、販売した。  
その中で山形県高島町のぶどうに、年間5回ほど、定期的に来てもらっているが、この集客がかなりある。地元や各地域関係の特色あるイベントに来ていただいて、集客を図っている。仙南圏域でも連携して集客につながってもらえばいいと思っている。

(佐々木座長)

- ・オルレの補足情報をいただいた。歩いた後は、買い物や飲食につながりにくいが、終わった後の情報を魅力的なものとしてセットで売り込まないと、事業者のメリットが少ない。県、事業者と一緒に考えて良い。コンテンツとしてはいいので、どう付加価値を生むか。具体的にどうお金を落としてもらうかというのは、考えていく必要がある。
- ・お客さんが来て、良質なサービスを、適切な料金を払って受けていただくことで、事業者がうまくいく。そうすると、事業者がまた県の政策にも協力してくれるので、その循環を、仙南圏域できちんと作っていく必要がある。

- ・議事（3）みやぎ観光振興会議設置要綱の一部改正について  
宮城県経済商工観光部観光戦略課 松本観光誘客推進担当課長から資料5により、「みやぎ観光振興  
会議設置要綱の一部改正について」説明

【意見】

（佐々木座長）

- ・ぜひ有益な部会にさせていただき、働いている皆さんが笑顔になるような、部会、会議の内容を期待する。詳細はこれからということであり、次の会議等で説明いただければ。
  
- ・議事（4）みやぎ蔵王三十六景地域の逸品の推奨について  
事務局から資料6により、「みやぎ蔵王三十六景地域の逸品の推奨について」説明  
委員からの質疑なく、1品目について推奨承認された。

- ・議事（5）その他  
なし

- 4 その他  
なし

（以上）